# メイドさんとご主人様の140文字日記 ①

作 ARM1475

# プロローグ。

---

彼（２８）の実家は金持ちである。
どれくらいの金持ちなのかの説明は割愛する。どーせこの物語はフィクションであり、実在の人物及び団体とは一切関係ありません。
都内某高で教鞭を執る彼は、芝浦にある高級マンションで悠々自適の独身生活を過ごしてきた。
残念ながら彼女はいない。昔はいた、とは本人の談である。
見栄で言ってるように見えないのは、彼はそれなりにイケメンであり、安定した収入など、モテる要素を多く備えているからだろう。
べ、別に作者が毒男で悔しいから彼女の設定を用意しないんじゃないんだからね！

それはそれとして。

「……誰」

彼の元にある日、両親の紹介でやってきたというメイドさんがやってきた。

「なんてことだ」

彼は思わず仰いだ。

「こんな小学生を働かせるなんて！　絶ｂ(ry」
「小学生じゃねーし」

ムッとするメイドさん。黒髪ロングの下でギラリと光る、三白眼が彼をちょっとだけ圧倒する。しかし端から見てもその小柄な幼児体型は小学 生。というか、最近の小学生はもっと発育が良いくらいである。

「ほれ」

メイドさんがつき出したのは、一枚の運転免許証。

「写真は確かにキミだけど……何故名前と住所がシールで隠されてる」
「個人情報保護の見地から」
「名前くらいは……」
「えーこ」
「……エー子？」
「アルファベットほうで」
「やっぱり未成年か」
「お前のアイはフシアナアイですかぁ？」

　そう言ってＡ子と名乗るメイドは免許証に書かれた生年月日を指した。

「……２４」

彼は免許証をガン見し、続いてＡ子を二度見した。

「身長か」
「無理矢理ボケなくていいから、ご主人様」

Ａ子は肩をすくめる。

「その様子なら低年齢層への異常性愛の気はなさそうで安心しました」
「つーか」

彼は肩をすくめた。

「俺はキミと暮らさなきゃならんと言うのか？」
「住み込みという言う契約ですので」

Ａ子はどこか不満げだった。

確かに、年頃の女性が殆ど面識のない独身の男の家に住み込みで働く事に抵抗を感じて当たり前である。彼は両親を心の中で罵った。

「いや、無理に住み込みじゃなくても」
「私、実家、追い出されましたので行くところがありません」
「え」

Ａ子は拳を作り、

「……あのババァ、家で引き籠もっているのは人としてどうか、なんてえらそうな事言って追い出しやがったんですよ」
「はあ」

ババアとはＡ子の肉親、恐らく母親であろう。彼は困惑した。

「あー、もう、働きたくないでござる！　働きたくないでござる！

　家でもっとモンハンやＰＳＯやっていたいのに！」
「うわぁ」

どうやらかなり痛いニートだったようである。

彼はこんな女を雇い押しつけた両親を心の中で呪った。

「つーか」
「はい」
「前はゲームばかりやっていたのか」
「そりゃもう一日中」
「飽きもせず？」
「飽きるく らいならゲームなんかやってませんよ、ＨＡＨＡＨＡ！」

彼は心の中で、駄目だこの女何とかしないと、と仰いだ。

「それはそれとして。もうこうなってしまっては仕方ないですし、嫌でも働かせて貰います。路頭に迷うのは嫌ですから」
「あー」

彼は思わず考え込む。流石にこう言うメイドは雇って大丈夫なのか心配になったらしい。

「返答がないと言う事は了解と判断します。それでは早速」

……

「え」

彼は見違えるようなＡ子の仕事ぶりにただ呆然としていた。決して汚くはないと思っていた自分の部屋がみるみるうちに光り輝き始めたのである。

「……俺、結構汚していたのか」
「独身男性の住み処では奇麗な方ではないかと」

Ａ子は窓枠のさんを化学ぞうきんでぬぐい取って掃除を完了させた。

「ちなみに夕飯は？」
「あ、ああ、今日は店屋物でも」
「いけません。冷蔵庫にまだ材料があるじゃないですか」
「え」

……

「え」

彼はテーブルの上に用意された料理を観て目を丸めた。

「あの残り物で良くこんな……しかも美味いし」
「ゲームで徹夜なんかしている時、小腹が空いた時は自分で台所のモノを漁って夜食作ってました。ある意味では料理は趣味でした」
「なるほど。これは頼もしい」

彼も、Ａ子の実力を目の当たりにしては、メイドとしての能力を認めざるを得なかった。
その頃には彼も流石に、Ａ子の事情に同情を覚えるよう になっていた。とりあえず後日、両親にはきっちり話を付けてやろうと思った。

「ご馳走様。しばらくは当面空いてる客間使ってくれ。荷物はいつ来る？」
「入れて良いのですね」
「え？　あ、ああ」
「で は」

そう言ってＡ子は携帯を取りだし、なにやらメールを送信する。
すると５分ほどでエプロン姿の黒服の男達が玄関から雪崩れ込んできた。

「何だ？！」

男達は皆、大きなダンボール箱を抱えていた。彼の目の前で次々とダンボール箱が客間に運び込まれていく。
まさに電撃戦と呼ぶべき搬入作業に 唖然とする彼の袖を、 Ａ子は掴んで言った。

「私の家の者です。８箱程度ですのでご安心を。折りたたみ式の衣類入れも含んでいます」
「あ、あれ、そ、そうなの？」

この時彼は動揺していた為に、後に知る事になる、 Ａ子に関するある重大な事実への手懸かりに気づいていなかった。
みるみるうちに客間が、荷 物を搬入していった男たちの手によってレイアウト変更されていく。
もともと客間にはテーブルくらいしか置いていなかった事もあり、客間からＡ子の 私室への
リフォームはあっという間に終わった。
あまりの事に彼は口を開けっ放しのままその一部始終を見ているだけだった。

「終わりました」

　Ａ子にそう言われてようやく、彼は我に返った。いつの間にかあの黒服たちもいなくなっていた。

「搬入したのは着替えと机と使っていたパソコンとゲーム機です」

よく見ると、部屋の隅に３箱ほど梱包を解いていないダンボール箱があった。

「とりあえずゲーム機は梱包を解いていません。後でカラーボックスを買って入れておきますのでしばらくあのままにしておきます」

実家追い出された原因抱えて押しかけてくるとは見上げた根性である。

「ゲーム機って」
「ツインファミコン、スーファミ、ゲームボーイにＰＣエンジンにマークⅢに、リンクスにジャガーに、えーと」
「マ ニアだーっ！　マニアがでたぁー！！」

彼は思わず絶叫する。

「失礼な。本物のマニアは基盤から集めます。私は基盤は集めません、あくまでもコンシューマ機のみです。それに掃除してて気づきましたがあなたも同 じくらい持ってるじゃないですか」
「いや、俺はそこまで……」

確かに彼もＰＳ３など、いくつかコンシューマ機を持ってるゲーム好きだが、そこまで古い機種は持っていなかった。
Ａ子は困惑する彼の顔を、 様子をうかがうようにしばらく見てから、うん、とうなずいた。

「何なら被ってるモノは売ってきましょうか。同じモノがあっても仕様がないし」
「え？　好きで集めてるんじゃ……」
「確かに好きで 集めてはいますが、遊べるゲームが無いモノにはあまり興味ありません。ソフトあってのハードですから」
「まぁ、そうだが……」
「どのみ ち、古いゲームはもう遊んでませんし。場所の事もありますし、丁度良い機会ですからヤフオクにでも流します」
「はぁ」

意外すぎるほど淡泊なＡ子に、彼は拍子抜けした。

とはいえ、大量のゴミもとい荷物を持ち込まれても困るのは自分である。彼は少し安心した。

「ところでご主人様」
「え」

彼は一瞬戸惑う。

「今、ご主人様って」
「雇われた以上、貴方は私のご主人様です」
「あ、ああ」

彼は生まれて初めての呼ばれ方に酷く動揺した。

ご主人様。

実際に言われるとこれほど気恥ずかしいモノは無い。

「ここって珍しく焼却炉があるんですね」
「あ、ああ、管理人さんが設置したものか。生ゴミ限定だけど、燃やせるゴミも少しなら入れて良いら しい」
「そうですか」

そう言うとＡ子は大きな紙袋を取り出し、

「ちょっとこれ捨ててきます」
「あ、ああ……」

ご主人様は頷いてみせる。

数分後、Ａ子はさっき持っていた紙袋をどこかに置いてきたらしく、手ぶらで帰ってきた。
何故かその顔は不機嫌そうであった。

「さっきの紙袋は……」
「捨ててきました。ゴミなんで」

「ふぅん。引っ越しで生ゴミなんて出るのかね」
「どこの世界に引っ 越しで生ゴミなんて出ますか」
「まぁ、な。ていうか何を捨てたの」
「引っ越し先でゴミなど出ないよう、必要なもの以外は持ってきていませ ん」

その割には使わないゲーム機を持ってきているんだな、とご主人様は心の中で突っ込んだ。

「捨てたのは先ほどの掃除で出たゴミです」
「へ？　あ、ああ、冷蔵庫で傷んだモノでも？」
「ベッドの下にあった本です」

「え」

ご主人様は思わず硬直する。

「長岡書房刊・『素晴らしき巨乳の世界』」

Ａ子がそう言った瞬間、ご主人様は自室のベッドに向かって飛び出した。Ａ子の目にはそれが音速を超えていたように見えた。
ややあって、ご主 人様の悲鳴が自室から届いた。

「な、ない！　俺の大事な巨乳本がっ！」
「女の価値は胸の大きさなどではありません」

Ａ子はご主人様の狼狽する声を聞いて鼻で笑う。

「畜生、畜生……っっ！！」

ご主人様は自室からドタバタ走り出してＡ子の横を駆け抜ける。玄関を飛び出していった先は間違いなく１階の焼却炉だろうが、既に問題の物はＡ子に よって燃やされた後だった。
そんな、自身の主人のみっともない姿に、Ａ子は呆れ気味にため息を吐いた。

「おっぱい、おっぱいとまぁ……いい歳した男が情けないというか」

ご主人様は焼却炉の前に駆け込むようにやってきて、そのふたを開ける。まだ熱を帯びていたその中には、かつてそれは巨乳の裸女のあられもな い姿が大写しにされた写真集だという事など判らないほどに真っ白に燃え尽きていた。
それを見てご主人様はがっくりと膝をついて俯いた。

「あのひんにゅうめぇぇぇ！！」

Ａ子は肩をすくめた。

「……契約とはいえこの先思いやられます。一目でわかりました、あの男は」

ご主人様は鬼のような形相をゆっくりと上げた。

「……男に二言は無い、今更追い出す訳にはいかんが……くそっ、体型で判るわ、あの女は」

# 「「敵だ」」

侍従関係初日からいきなりお互いを敵と認識し合う、そんなメイドさんとご主人様との平凡な日々の日記のはじまりはじまり一。

登場人物

---

・ご主人様
　……２８歳。いわゆるイケメン。職業は教師。高校で教鞭を執る。何を教えているかは不明だが、恐らく文系。
　良家の次男で芝浦にある高級マンションで自由気ままに一人暮らしをしていたが、両親から強引に住み込みで身の回りの世話をするメイド（Ａ子）を送りつけられる。
　好みは巨乳で顔や性格は二の次。基本、物事にあまりこだわらないサッパリした性格のハズだが何故かＡ子相手にツッコミが激しい。
　Ａ子が来て早々、部屋に隠していたマイ・フェバレット巨乳エロ本を焼き捨てられた事から「この女は敵」と認識している様子。
　でもゲームの話になると意気投合するので何とか主従関係を維持出来ている。
　ゲームが好きでヲタクの域にあるが、だが腕はいまいち。カッとなって壊した携帯ゲーム機は数知れず。
　ゲーム好きだがエロゲーは苦手。自室で表情も変えずにエロゲーをプレイするＡ子に困惑する事もしばしば。

・Ａ子
　……本名不明。というか名乗らないのでご主人様も知らないまま。
　黒髪のロングヘア。小柄で三白眼、貧乳というか幼児体型。年齢も不詳だが、大学は卒業しているとの事。運転免許証によれば２４歳。
　才媛で勝ち気な性格。辛辣な口調故に、ご主人様と衝突する事もしばしば。
　家事能力は完璧だが、限度を考えない行動が多く、無駄な料理を作ったりして失敗する事も。
　体型コンプレックスから巨乳を敵視し、ご主人様の部屋で巨乳のエロ本を見つけてしまった事から「この男は敵」と認識している様子。
　しかし、ご主人同様ゲーム好きで、ゲームの話になると意気投合する。
　コレクター的な面が強いが“集める”行為が目的である為、入手したゲームに対する執着力は意外にも無い。
　その為、遊ばなくなったゲームはネットオークションに良く放出している。
　またムッツリスケベな性格で、エロゲーにも抵抗なく接する事が出来る。

メイドさんと
ご主人様の
140文字日記

第１話

---

メイドのＡ子は、主人がまた朝食を残して行くので、たまり兼ねてとうとう言った。

「残さず食べないと身体に良く有りませんよ！」

すると主人は不思議そうな顔でＡ子を見た。

「え？ 猿の脳ミソ料理って頭から下の肉も食わなければ駄目なのか?」

「無論です！」

第２話

---

メイドのＡ子は、主人の寝室のゴミ箱から出て来た大量のブツを前に呆れ返った。

「まるで猿ですね」

「若いんだから仕方ないだろ。それとも君がお相手してくれるのかね？」

「モンハンでミスったからってこんなにＰＳＰを壁に投げ付けて壊して買い直す短気な人とはパーティープレイはお断りします」

第３話

---

「ご主人様、洗濯物から私の下着持っていったでしょ！」

メイドのＡ子は主人の部屋に入るなりいきなり怒鳴る。

「誰がお前の下着なんか」

「いえ現に」

そう言ってＡ子は主人の股間を指す。

「おい、コレは褌だが」

「さらしです」

「……」

「たとえ我が主でも、私の胸を哀れんでみる事は許しません！」

第４話

---

「ご主人様、良い話と悪い話があります」

「何だい藪から棒に。で良い話とは？」

「業者から新鮮な卵が届きました」

「で、悪い話とは？」

「今夜の食材は卵しかありません」

「また買い忘れたのか…。仕方ない、オムレツでも作ってくれ」

「届いたのはイクラです。因みに米も買い忘れました」

「待てやコラ」

第５話

---

「ご主人様、停電です」

「見りゃ分かるわそんな事。さっきの雷か？」

「恐らく」

「復旧は？」

「非常電源用の燃料買い忘れました」

「またかい。これでは仕事にならないな、今夜はもう寝るとしよう」

「悪い話がもう一つあります」

「?」

「あれ？ご主人様、こんな所で誰と話してるのです？」

「ぎゃあっ！」

第６話

---

「僕パイパンマン！　今日も際どい水着で難儀してる女の子の毛を剃ってあげたよ！

　出たなインキンマン！　うわっ錆びて力が出ないぃ…」

「パイパンマン替え刃じゃよ！」

「よーし！　くらえ、シェーぱーんち！」

「かいかいきーん」

「…Ａ子君がここまでノリが良いとは」

「ご主人様、いいから髭剃って朝飯食え」

第７話

---

「今日も暑かったなぁ」

「夏ですから」

「汗も掻かずに涼しげに言うなぁＡ子君」

「男の癖に情けない。これくらいの暑さで泣き事ですか」

「ぬっ…く。…しかしそんなに着込んで暑くないのか？」

「心頭滅却すれば火もまた涼」

ゴトッ。

「何その足下に落ちてきた冷却剤の塊」

「女だからいいんです」

第８話

---

Ａ子は夜天を削ぐ無数の流星に、ガラにもないと思いつつ願いを向けていた。

「お星様、身長も低い、胸も無…ちょっと足りない私ですがどうかグラマーになれ…」

同じ頃、ご主人様も星に願っていた。

「いつか巨乳のメイドさんを雇えますように」

不意にＡ子は無性に腹が立ち、

「…ご主人、死ねばいいのに」

第９話

---

「ヤフオクですか」

モニタを睨むご主人様にＡ子が訊く。

「マニアックなゲームの出品を見つけてな」

「そう言うのって大抵プレミアですよね」

「○○○って奴だ」

「…それ、クソゲー」

「それでもプレイしたいのがゲーマーだ。……よし落札成功」

「手渡しするから送料要りませんよ」

「お前の出品かいっ！」

第１０話

---

*「はぁ…はぁ…」*

暗がりでＡ子の悶え声が続いていた。

*「…駄目…ご主人様…ぁっ…！」*

Ａ子は切なげな声でご主人様に哀願する。

しかしご主人様は何も答えず事を続けていた。

「…あ、だ、駄目ッ！漏れちゃう」

「朝のトイレは早い者勝ちだ。…それに…今の声で一寸便所から出づらくなった」

「何故っ！？」

第１１話

---

「ご主人様、秋刀魚は昔『三馬』と書かれていたのをご存じすか」

「知ってるさ。一匹で三馬力出る、つまり滋養に優れた魚だからそう呼ばれていた」

「ご名答です。栄養満点で毎日でも食べられます」

「…だから冷蔵庫一杯になる程買ったのか？」

「高くなる前に買い占めておこうかと」

「腐ってまうわっ！」

## 第１２話

---

「ご主人様、私、先ほど知ったんですが、沖縄の銘菓『ちんすこう』の『ちん』って『珍味』の『珍』以外に、『金』と言う意味があるそうですが、あれエッチじゃないですか」

「…Ａ子君、キミは辞書でエッチな単語を見つけるとラインマーカーで色づけするタイプでしょ」

「よくご存じで」

「真顔で言うな」

第１３話

---

*ひっそりと誕生したその生命体は全宇宙を滅ぼす力を備えていた。*

*無限の進化能力と飽くなき食欲そして体表からまき散らされる燐はあらゆる物質を分子レベルに分解する力を秘めており、もはやこの宇宙は滅び*

「…ご主人様？　汚い蛾を踏んじゃってますよ」

*こうして宇宙の危機はひっそりと去っていった。*

第１４話

---

*ひっそりと降臨したその救世主は全宇宙を救世する使命を帯びていた。*

*彼の光の羽から注がれる暖かい光は悪を改心させ、傷ついた者達を瞬時に癒やす全能の力を秘めており、病んだ宇宙を照らさんとし*

「…ったく鬱陶しい蚊だったなあ。これでやっと寝られる」

*こうして救世の時はひっそりと去っていった　　。*

第１５話

---

「ほう。この可愛いのは餃子の皮で作ったピザか」

Ａ子が用意した本日の夕餉は手のひらサイズのピザだった。

「ピザの生地と餃子の皮は同じモノなのでもしや、と思って作ってみました」

「流石だ。…で、沢山あるが何個作ったんだ」

「特売だったので、つい」

「そこに転がってる大量の箱はそれかいっ！」

第１６話

---

「私もピザばかりでは飽きると思って、別のモノも用意しています」

そう言ってＡ子はお茶碗を取り出した。

「皮で拉麺の麺を打ってみました」

ミニサイズの細麺拉麺には自家製チャーシューまで入っていた。

「…器用とか感心する前に質問を一つ」

「？」

「何故餃子を作らない」

「あ」

「あ、じゃねぇぇ！！」

第１７話

---

「ご主人様。この『例のプール』って知ってます？」

Ａ子はモニタに映る、天窓付き屋内プールを指す。

「えーと」

「何故畏まった口調」

「別に畏まってないから！　てか何故これを！」

「暑いんで近いプールを探していたらこれが。で、ご主人様はどのＤＶＤで観ました？」

「知ってて訊いてるだろ」

「はい」

第１８話

---

「このムッツリ女め…。でも『例のプール』のネット検索すれば一発で拾って来るんだなコレ」

「いわゆる聖地という奴ですね」

「…Ａ子、俺には心なしか一文字漢字が違っているように聞こえるが」

「気のせいです。で、ご主人様はこのプールを最初にどんな水着物で観ました？」

「だーかーらー（泣）」

第１９話

---

「本当、印象深いプールだよな」

「女優のほうは残らないんですか」

「いや、だから…」

返答に窮するご主人様を見て、Ａ子は困惑を浮かべる。

「…まさか男優のほうにっ？」

「違うわっ！」

「ですよねー」

そう言ってＡ子は机の下から競泳水着ＡＶを取り出し、

「ご主人様は物を隠すのが下手です」

「うわーん」

第２０話

---

「ご主人様、なぞなぞです」

帰宅後、ご主人様がシャワーで汗を流していると、Ａ子が浴室の扉の向こうから謎掛けしてきた。

「真っ昼間なのに空が黒いの、なーんだ？」

「？　日食？」

「ブー。正解は天井を」

言われてご主人は仰いだ。

そこには何と、黒カビにびっしり覆われた天井が。

「うぉいっ！？」

第２１話

---

「何で天井がこんな酷い事にっ！」

「浴室は湿気っていますから、通気を良くしないと…」

「いや、そうじゃなくて！何でこんな酷い事になるまで放置していた？」

ご主人様は詰問するがＡ子は何故か沈黙する。

「おい！」

「…届きません」

小学生サイズのＡ子は扉の向こうでピョンと跳びはねてみせた。

第２２話

---

次の休日、ご主人様は天井に手が届かないＡ子に代わり、渋々、脚立を使って浴室のカビ取り作業を行った。

「ちっちゃいメイドはこういう時、役に立たないよなあ…」

「デカけりゃ良いってもんじゃないですけどね」

「胸は無いのに態度のデカいメイドというのもなぁ…」

「酢、置きますね」

「やめろぉ！」

第２３話

---

ご主人様が夏風邪を引いてしまった。

「あれほどクーラーのかけ過ぎには気をつけて下さいと…」

「この暑さじゃ仕方ないだろ、くしゅん。ところで質問いいか」

「はい」

「何だその格好」

ご主人様は怪訝そうな顔でＡ子を見る。

「介護の正装と言えばナース服じゃありませんか」

Ａ子はくるりと一回転した。

第２４話

---

ピンクのナース服に身を包み、カルテを小脇に抱えてニコニコするＡ子を見て、ご主人様はため息をついた。

「何か言いたげですね」

「…普通そんな格好するかと」

「メイドたる者、何事にもプロフェッショナルであるべきです」

ご主人様はもう一度ため息を吐き、

「で、その服わざわざ業者から取り寄せたのか」

第２５話

---

「はい。この介護白衣は現場で使用されてる本物です。ご主人様は完璧にナースをこなす私を褒めるべきです」

「ごめん無理」

その衣装は、幼児体型のＡ子には残念すぎるものだった。

「どー見ても小学校の給食当番」

……

一時間後、暖房全開で我慢大会を強いられたご主人様は汗まみれで悶死寸前になっていた。